

御靈に導かれる人生

(使徒八・二五～四〇)

『御靈に導かれて』。これは私たちの教団の三十周年記念誌のタイトル。ちなみに五十周年誌は『みことばに立ち、御靈に導かれて』である。この変遷にはかつて『聖靈充满』を非常に強調したヨイド純福音教会の現在の担任牧師であるイ・ヨンファン牧師が良く語る『みことば充满・聖靈充満』と同じような意図を感じる。そこにはペントコステ運動が感情の高まりだけを強調する「熱狂主義」ではなく、自分たちは聖書に立脚した堅実な福音主義の一翼を担う運動であるという、強い主張があるように思えるのだ。閑話休題。今朝は玉川牧師から「ペントコステ的なメッセージをしてほしい」ということで招かれたのであるが、先ほど開いた聖書に登場する伝道者ピリポの記述から聖靈に導かれる人生について三つお話ししたい。

一、命じられるままに
このセクションの始まりは聖書によつて接続詞が異なる。新共同訳は「さて」、新改訳は「ところが」である

る。これはどちらにも訳せるのだが、文脈から考えると個人的には逆接とする方がよいと思う。というのもこの前の段落はピリポによるサマリヤ伝道についての記事であるが、一言でいえばそれは「成功」であった。使徒一・八の約束通りエルサレムで起こった力の伝道はサマリヤでも実現し、使徒たちの目の前で聖靈の大傾注が起つたのだ。そしてピリポは間違いなく、この伝道の中心人物であつた。しかし主はピリポにそのリバイバルを離れ、一路ガザに下るよう命じる。大成功的伝道地を途中で後にするわけだから、ピリポには未練があつても不思議はない。しかしピリポはすかさず立って出かけて行つた。まさに「即刻従順」である。御靈に導かれたら、それに従う。これが大切なのだ。

二、機会を生かして
エルサレムから北のサマリヤから一転エルサレム南西のガザに赴いたピリポであったが、彼が出会つたのはエチオピアの宦官であつた。この宦官は神殿での礼拝では飽き足らず馬車の中で聖書を音読していた。真理に飢え乾いていたことが見て取れる。しかし当時のユダヤ教では彼は二重の意味で「招かれざる客」であった。彼は

異邦人（おそらくは黒人）であつたし宦官つまり去勢された男子でもあつたのだ（申命記二三・一以下参照）。彼は真理を求めて遠くからエルサレムに来たのだが、彼の願いは満たされなかつた。彼に用意されていたのは「異邦人の庭」であり、ひょつとしたら、そのカストラートを悟らせないために沈黙を保つてることしかできなかつたのかもしれない。しかしピリポは御靈に導かれ、そうした宗教的「タブー」を破つて宦官と対話を始めたのである。御靈の導きに従うとき、私たちの人生を変える出会いが与えられるのだ（使徒一六・六、七）

三、イエスを伝える

イザヤ書五三章を読んでいた宦官は「このしもべとは誰か」と問うた。ピリポはどう答えたか。三五節にはこうある。「ピリポは口をひらき、この聖句から始めて、イエスのことを持て宣べ伝えた」彼がのべ伝えたのは「基本的真理に関する宣言」でもなければ、「規則教規並びに諸規定」でもなかつた。彼が伝えたのはイエスであつた。天下を救いうる唯一のお方であるイエスのご人格と働きについて、ピリポは大胆に語つたのだ。結果はどうだ。宦官は自ら洗礼を志願し、ピリポが取

り去られた後も喜びに満ちて旅をつづけた。これは推論だが、喜びにあふれた彼がそのままイザヤ書を読んでいたなら、彼の喜びはますます増し加わつたはずだ。というのもイザヤ五六・三～五には神の契約を守る宦官に対する豊かな祝福が預言されているからである。